



日中や夜間に、時間を決めて行われる自主パトロール。高齢者と子どもたちのつながりを作るきっかけにもなった

さらに、昭和28年の「6・26大水害」がきっかけとなり、ゆるやかな高台の帯山地区が住宅地として注目されるようになりました。昭和35年頃には、一戸建ての住宅が建ち並ぶ住宅団地が畑の中に出現。その後も熊本県庁の移転や国道57号東バイパスの開通などで一気に宅地開発が進み、人口も急増しました。その結果、昭和45年から52年にかけては帯山小学校の児童数が2千人を超え、最盛期には児童数2504人に達しました。

### 昭和30年代から人口が急増した新しいまち

## 帯山

校区は、かつては大な畑や林、旧陸軍の帯山練兵場などがありました。多くの人が暮らし始めたのは、戦後、開拓団の人たちが農地の開墾のために移り住んでからのことです。

校区は、かつては健康村の一部で広



国体道路と東バイパスが通り、住宅地と商店が混在する帯山校区。交通量の多い地域でもある

# 戦後生まれのふるさとで、世代間の絆を築く

当時、帯山小学校は「日本一のマンモス小学校」とまで言われていました。今でも校区人口が1万4千人を超え、中央区では有数の人口規模を誇っています。

現在は、戦後に帯山校区に移り住んだ人たちの子どもたちの世代が暮らす時代となりました。近隣には公・私立の大学や高校も多く、教育環境に恵まれた住宅地として発展しています。

### 小学校を中心に地域の「絆」を広げる

## 戦後

「先駆け」として、ここまで歩んできた帯山校区でも、マンションや集合住宅の建設が進むにつれて、校区外から移ってくる人が増えてきました。帯山校区自治協議会の小島知昭会長は、「子ども会、婦人会、老人会と、各世代にはそれぞれにまとまりがあり、それぞれの



帯山校区では交通指導を積極的に行っている。朝や下校時など、子どもたちの交通安全を守るため、街角に指導員が立つ

組織ごとに活動していますが、世代間の交流という点からは課題が残されていると思います。今年10年目を迎えた帯山音頭の盆踊りがある夏祭りや、7つの町内対抗の体育大会、帯山小学校でのどんじや、地藏まつり、文化祭など、帯山でこれまで行ってきた校区活動をもちと活性化することで、幅広い世代の人たちが交流する機会を増やすことができると、地域の人たちの「絆づくり」に知恵を絞っています。

実は「絆づくり」の最大の狙いは、防犯・防災の強化です。地域の人たちが、お互いに顔見知りであることが、犯罪の防止や災害時の助け合いに力を発揮します。とくに、帯山小学校には地域の人たちがさまざまな行事やイベントで集まることが多く、自治会でも帯山小学校の存在を地域活動の中心に据え、活動のきっかけ